

A s i a n J o u r n a l o f
**H U M A N
S E R V I C E S**

Printed 2012.0430 ISSN2186-3350
Published by Asian Society of Human Services

April 2012
VOL. 2



ORIGINAL ARTICLE 2

知的障害特別支援学校高等部生徒における スポーツ活動経験と属性変数との関連

Relation between sports activity experience and individual attributes of students with intellectual disabilities in high-school special needs education programs

奥住 秀之¹⁾ (Hideyuki OKUZUMI), 池田 吉史¹⁾ (Yoshifumi IKEDA)
平田 正吾¹⁾ (Shogo HIRATA), 國分 充¹⁾ (Mitsuru KOKUBUN)

1) 東京学芸大学

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

okuzumi@u-gakugei.ac.jp

ABSTRACT

本研究では、知的障害特別支援学校高等部の生徒を対象に、経験のあるスポーツ活動の種類とその構造、経験と属性との関連、及び経験と現在又は将来のスポーツ活動との関連について検討することを目的とした。調査は自記式で、282人のデータを分析対象とした。その結果、経験の多いスポーツとしてバスケットボール、水泳、サッカーなど、少ないものとしてゴルフ、剣道、ビリヤードなどが指摘された。因子分析の結果、学校・家庭スポーツ因子、球技スポーツ因子、スタミナスポーツ因子、ダンススポーツ因子、趣味スポーツ因子の5つが抽出された。学校・家庭スポーツ経験の多い生徒ほど、現在休日にスポーツを行なっていること、球技スポーツとスタミナスポーツの経験は男子で多いこと、ダンススポーツは高学年、女性、特別支援学校卒業生ほど経験が多いことが明らかになった。

For students with intellectual disabilities in high-school special needs education programs, this study examined the kinds and structures of sports activities that have been experienced, their relation with individual student attributes, and their relation with present circumstances and prospects of sports activities. Participants were administered a self-report questionnaire, yielding data of 282 students. The results of analyses indicated the following. The sports activities experienced most were basketball, swimming, and football. The least experienced were golf, Kendo, and billiards. Factor analysis revealed five factors: school/home sports, ball sports, stamina sports, dance sports, and hobby sports. Results show that ball sports and stamina sports were

Received
December 21, 2011

Accepted
January 11, 2012

Published
April 30, 2012

experienced by boys more than girls and that dance sports had been experienced more by older girls who had graduated from junior-high-school special needs education programs.

<Key-words>

知的障害、スポーツ、余暇活動、因子分析、重回帰分析

intellectual disability, sports, leisure activity, factor analysis, multiple regression analysis

Asian J Human Services, 2012, 2:21-28. © 2012 Asian Society of Human Services

I. はじめに

知的障害のある人（以下、知的障害者とする）の余暇活動の重要性がますます注目されており、中でもスポーツ活動が生活の質(QOL)を高めることが指摘されている（金子・南條, 2007）。しかし、知的障害児・者の余暇活動について厳しい実態が報告され、たとえば、青年・成人期の知的障害者では、テレビ視聴や音楽・映画鑑賞など自宅で休日を過ごすことが多く、スポーツ活動を楽しむ機会が少ないことが報告されている（宮本・大野, 1996; 高畑・武蔵, 1997、伊達・古川, 2003、町田・原・松田・永井・太田, 2004）。一方で、家族とともに行なう知的障害者のスポーツ活動の取組など、余暇としてのスポーツ活動に関する実践研究も見られている（荒井・上田, 2008; 荒井・中村, 2009）。

知的障害児・者の余暇活動の実態やニーズなどについては、本人を取り巻く支援者を対象とした調査が多いが、最近では、知的障害児・者本人を対象にする調査が散見されている。奥住・國分・橋本・北島(2008)は、160人の高等部生徒に対して卒業後の労働と余暇に関する意識調査を行ない、9割以上の生徒は余暇が楽しみの一方、4割もの生徒が余暇活動を行なう友人との人間関係を、5割の生徒が余暇の金銭管理を心配する実態を報告した。また、奥住・國分・北島(2010)は、166人の高等部生徒に対して卒業後の労働と余暇が楽しみかどうかの調査を行ない、約9割の生徒が卒業後の余暇活動を楽しみとする一方で、余暇活動を通して新しい友人を作ることを楽しみと思わない生徒が約2割、余暇を通して社会に参加することを楽しみと思わない生徒も2割以上いることを明らかにした（この報告と絡めて、奥住・池田・國分(2011)は知的障害生徒の労働期待感も検討している）。

こうした中、奥住・國分・北島(2011)は、148人の高等部生徒に対して、現在頻繁に行なっている余暇活動と卒業後に行ないたい余暇活動の調査を行ない、現在はテレビやゲームが多いが、卒業後にはDVD観賞、小説の読書、カラオケ、スポーツなどを行ないたいとする回答が増加した。このように本論のテーマであるスポーツは、知的障害生徒が注目する余暇活動であり、これまでのスポーツ活動経験や現在の経験、さらには卒業後のスポーツ活動期待など、幅広く調査検討することが求められている。

本研究では、知的障害特別支援学校高等部に在籍する生徒を対象に、本人自らが回答する自記式の質問紙を用いて、これまで経験のあるスポーツ活動の種類とその構造、その経験と対象者の属性との関連、その経験が現在や将来のスポーツ活動の実態や意識とどのように関連しているかについて検討することを目的とする。

II. 方法

1. 対象

4つの特別支援学校高等部（普通科）に調査を依頼し、承諾を得た。そこに在籍する知的障害のある生徒のうち、文字を読むことができ、かつ一定の理解力があると判断される生徒を対象とした（対象者になるかどうかの判断は学校が行なった）。全員が学校と本人から承諾が得られた者である。322人に調査を行なった。欠損値のない有効回答数は282部であり、これを分析対象とした。内訳については、性別は男子187人、女子95人、学年は1年生84人、2年生105人、3年生93人であった。

2. 調査方法および内容

調査用紙は、生徒本人が読み進めていくことができるよう、漢字にふり仮名をふり、また、すべての項目を選択肢から該当するものに丸をつける形式にした。調査用紙はフェースシートと経験のあるスポーツを尋ねる項目よりなる。

フェースシートとして、対象者の属性とスポーツ活動の様子についての8つの問いを設定した。問1、学年：現在の学年を回答する。問2、性別：性別を回答する。問3、出身中学校：出身中学校が中学校か特別支援学校中学部かの2択で回答する。問4、クラブ活動に所属していますか：はい、いいえ、の2択で回答する。問5、スポーツは得意ですか：とても得意、やや得意、あまり得意でない、まったく得意ではない、の4択で回答する。問6、スポーツをすることは好きですか：とても好き、やや好き、あまり好きでない、まったく好きではない、の4択で回答する。問7、現在休日にスポーツをしますか：よくする、たまにする、あまりしない、まったくしない、の4択で回答する。問8、卒業後は休日にスポーツをしたいですか：たくさんしたい、たまにしたい、あまりしたくない、まったくしたくない、の4択で回答する。

これまでに行った経験のあるスポーツを回答する項目として、小学校と中学校の学習指導要領などを参考に20種類のスポーツを取り上げ、それぞれについてこれまで行なった経験があるかないかという2択で回答を求めた。20種のスポーツは、野球（またはソフトボール）、テニス、バレーボール、ドッチボール、バスケットボール、サッカー（またはフットサル）、バドミントン、卓球、ゴルフ（またはグランドゴルフ）、ビリヤード、ボウリング、剣道、柔道、水泳、スキー（またはスノーボード）、スケート、サイクリング、ジョギング（またはウォーキング）、エアロビクス、ダンスである。

3. 統計処理

20種のスポーツ経験の有無の度数分布、20種のスポーツ経験の因子分析、フェースシート8項目と因子得点との関係性の分析を行なった。各質問項目はノンパラメトリックデータのため、以下の点数を与えた。学年はそのまま1～3で数値化した。数値が高いほど学年が高い。性別はダミー変数で男子0、女子1である。出身学校はダミー変数で中学校0、特別支援学校1である。クラブ活動の所属は所属あり0、所属なし1である。問5～問8については、1～4点と点数化し、肯定的回答で点数が高くなるようにした。20種のスポーツの経験については、それぞれ経験なし0、経験あり1である。

因子分析は主因子法、バリマックス回転で行ない、固有値1以上で探索的に因子数を決定する。因子得点とフェースシートの8変数の関連については、得られる因子得点を従属変数、フェースシートの8項目を独立変数とする重回帰分析（強制投入法）を行なう。統計ソフトはSPSSを用いる。

III. 結果

1. 経験のあるスポーツ

表1は、20のスポーツごとに、これまで行なった経験があると回答した人数(N)と百分率(%)を示したものである。経験者の多いスポーツ順に並べた。経験の多いスポーツを見ると、バスケットボール、水泳、サッカー、ダンス、ドッジボールなど、学校の体育活動で行なったと考えられるスポーツや、ボーリングやジョギングなど日常生活の中で簡便に行なえるものが上位に見られている。逆に、経験の少ないものとして、ゴルフ、剣道、ビリヤード、柔道などが指摘される。

表1 経験のあるスポーツ活動の人数(n)と百分率(%)
(経験ありの回答者が多い順に示した)

種目	n	%
バスケットボール	202	72
水泳	197	70
ボーリング	149	53
ジョギング	141	50
サッカー	133	47
ドッジボール	123	44
ダンス	123	44
バドミントン	106	38
卓球	103	37
野球	82	29
サイクリング	81	29
スキー	80	28
バレーボール	74	26
テニス	61	22
スケート	53	19
エアロビクス	47	17
ゴルフ	36	13
剣道	35	12
ビリヤード	32	11
柔道	24	9

Received
December 21,2011

Accepted
January 11,2012

Published
April 30,2012

2. 経験したスポーツの因子構造

スポーツ 20 項目について、主因子法、バリマックス回転による探索的因子分析を行ない、固有値 1 以上で 5 因子を抽出した。表 2 はその結果をまとめたものである。

第 1 因子についてはスキー、バレーボール、スケートなどの因子負荷量が高く、学校や家庭生活でよく行なうスポーツ（学校・家庭スポーツ）と命名した。第 2 因子については、サッカー、野球、バスケットボールが含まれ、球技スポーツと命名した。第 3 因子については、水泳、ジョギング、サイクリングなどで、一人で行なうことができスタミナ（持久力）が求められるスポーツ（スタミナスポーツ）と命名した。第 4 因子については、ダンスとエアロビクスであり、ダンススポーツと命名した。第 5 因子については、ビリヤードなどで、趣味スポーツと命名した。

表 2 20 種のスポーツの因子構造（因子分析の結果（主因子法、バリマックス回転））

項目	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5	共通性
スキー	.641	.190	.347	.005	.048	.570
バレーボール	.583	.186	.005	.143	.252	.459
スケート	.569	.031	.174	.048	.060	.361
バドミントン	.540	.292	.076	.178	.076	.420
ドッジボール	.535	.338	.289	.255	.069	.554
卓球	.525	.319	.185	.083	.140	.438
柔道	.414	.111	.074	-.048	.243	.251
ゴルフ	.374	.133	.120	.071	.326	.284
剣道	.364	.065	.143	.078	.194	.201
サッカー	.235	.690	.252	.047	.063	.601
野球	.141	.482	.117	-.025	.223	.317
バスケットボール	.281	.363	.007	.294	-.072	.302
水泳	.160	.135	.493	.331	-.071	.401
ジョギング	.107	.154	.470	.120	.130	.287
サイクリング	.297	.059	.444	.052	.210	.336
ボーリング	.337	.217	.363	.235	.169	.376
ダンス	.062	.016	.179	.706	.089	.542
エアロビクス	.053	.037	.146	.345	.262	.213
ビリヤード	.157	.043	.074	.065	.580	.372
テニス	.253	.255	.096	.199	.398	.337
因子寄与	2.859	1.409	1.253	1.071	1.027	7.620
因子寄与率 (%)	14.30	7.04	6.26	5.36	5.14	38.10

3. 因子得点とフェースシート変数との関連

表 3 は、5 つの因子得点それぞれを従属変数、フェースシートの 8 項目を独立変数とする重回帰分析（強制投入法）の結果をまとめたものである。第 5 因子の趣味スポーツを除く 4

つの因子得点で有意な決定係数が得られ、モデルは有意と判断された。第1因子の学校・家庭スポーツについては、「現在スポーツを行なっていますか」という項目の標準偏回帰係数(β)が有意であり、学校・家庭スポーツ経験の多い生徒ほど、現在の休日にスポーツを行なっていることがわかる。第2因子の球技スポーツについては、性別の標準偏回帰係数(β)だけが有意であり、男子生徒ほど球技スポーツの経験が多いことがわかる。第3因子の個人スポーツについても、性別の標準偏回帰係数(β)だけが有意であり、これも男子生徒ほど個人スポーツの経験が多い。第4因子のダンススポーツについては、学年、性別、出身学校の標準偏回帰係数(β)が有意であり、学年が高いほど、女性ほど、特別支援学校卒業生ほどダンススポーツ経験が多いことがわかる。

表3 5つの因子得点と個人変数との関連（重回帰分析（強制投入法）の結果）

独立変数	学校・家庭	球技	スタミナ	ダンス	趣味
	スポーツ	スポーツ	スポーツ	スポーツ	スポーツ
	(因子1)	(因子2)	(因子3)	(因子4)	(因子5)
学年（1年1、2年2、3年3）	-.056	-.086	.090	.142*	.057
性別（男0、女1）	.014	-.267**	-.147*	.263**	-.095
出身学校種（中学校1、特別支援学校2）	-.115	-.076	.073	.132*	-.006
クラブ活動の所属（なし0、あり1）	-.117	-.005	.041	-.100	-.025
スポーツは得意か(4～1点)	-.010	-.106	.094	.125	.079
現在、休日にスポーツを行うか(4～1点)	.171*	.126	.124	.032	.145
卒業後、休日にスポーツを行いたい か(4～1点)	.007	-.053	.035	.019	-.077
スポーツを行うことは好きか(4～1点)	-.163	.170	-.177	-.021	-.016
重相関係数 (R)	.241*	.348***	.254*	.364**	.205

*p<.05 **p<.001

IV. 考察

これまで経験したスポーツについては、バスケットボール、水泳、サッカー、ダンス、ドッジボールなど、学校の体育活動で行なわれるものについて、多くの生徒が経験ありと回答した。中学校、特別支援学校中学部という出身学校を問わず、体育教育でよく行なわれるスポーツ活動については、知的障害生徒が意識を持って取り組んでいたことが示唆される。一方、ゴルフ、剣道、ビリヤード、柔道などの経験の少ないという結果については、これは知的障害のない高校生一般についても言えるものでもあることが推察され、コントロールとしての高校生の調査が必要であると考えられる。

経験したスポーツの因子構造については、5つの因子構造が得られた。第2～5因子の命名についてはおおむね妥当と考えられるが、第1因子の命名については、スキー、バレーボール、スケートなどの因子負荷量の高さから、学校や家庭生活でよく行なうスポーツ（学校・

家庭スポーツ)と命名したが、スキーとスケートといういわゆるウインタースポーツ2つがともこの因子に含まれたことから、その影響も考えなければならないかもしれない。

因子得点とフェースシート変数との関連について、まず、学年、性別、出身中学校、現在のクラブ活動の参加の有無では、性別で特徴的な結果が得られた。すなわち、球技スポーツとスタミナスポーツは男子生徒で、ダンススポーツは女子生徒で経験が多かった。これは知的障害のない高校生と同様の傾向があることが推察される。学年の影響はダンススポーツだけで見られた。知的障害特別支援学校の体育的活動でダンスを位置づけていることで、学年が上がるにつれて経験者が増えると考えられる。このことは、中学校よりも特別支援学校中学部でダンス経験者が多いという結果とも重なるところだろう。

一方、現在のスポーツ活動や卒業後のスポーツ活動意識との関係は、学校・家庭スポーツ経験の多い生徒ほど、現在の休日にスポーツを行なっていること以外は、有意な関係は得られなかった。特に「卒業後は休日にスポーツをしたいですか」という項目にこれまでのスポーツ経験が影響しないことについては、教育的効果等の意味を再検討することにつながる可能性もある。家族で行なうスポーツ活動の実践的な取組に関する先行研究もあるが(荒井・上田, 2008; 荒井・中村, 2009)、こうした卒業の余暇活動につながるような学齢期における体育活動、スポーツ活動の充実が求められるだろう。

本研究では、最近の研究で注目されている知的障害児・者本人を対象とした調査である。知的障害の中で文字を読める生徒に限定された調査であり、また、過去の経験を尋ねる調査であるためデータの信頼性の問題も考えられるが、しかし、こうした課題を認めつつ知的障害本人を対象にする調査はますます重要になるだろう。さらなる研究の積み重ねが期待される。

付記

調査にご協力いただいた特別支援学校の先生方と、回答に快諾してくれた生徒に深く感謝申し上げます。本調査の実施と分析には、太田綾子氏(東京学芸大学特別支援教育特別専攻科修了、現所属:東京都立八王子特別支援学校)の協力を得ました。記して謝意を表します。本研究の一部は、文部科学省科研費補助金(研究代表者:奥住秀之、課題番号:21531012)により行われた。

文献

- 1) 荒井弘和・上田暁史(2008) 知的障害のある者とその親が参加したアダプテッド・スポーツプログラムの恩恵と負担の探索的検討. *障害者スポーツ科学*, 6, 33-39.
- 2) 荒井弘和・中村友浩(2009) 家族で参加するアダプテッド・スポーツプログラムに伴う精神的健康の変化: 知的障害者の親を対象として. *障害者スポーツ科学*, 7, 55-60.
- 3) 伊達裕史・古川宇一(2003) 障害児・者が地域で生活するために必要なサポートに関する考察—中学校障害児学級卒業生及びその保護者の聞き取り調査から—. *情緒障害教育研究紀要*, 22, 223-228.
- 4) 金子勝司・南條正人(2007) 知的障害児(者)のスポーツ・レクリエーション活動と生

Received
December 21, 2011

Accepted
January 11, 2012

Published
April 30, 2012

- 活の質(QOL)に関する研究－性別による活動群と非活動群からの比較検討－. 共栄学園短期大学研究紀要, 23, 111-125.
- 5) 町田一男・原美智子・松田直・永井真紀・太田裕子 (2004) 知的障害養護学校卒業後の生活－その実態と支援・相談の方向性－. 群馬大学教育実践研究, 21, 261-273.
 - 6) 宮本文雄・大野由三 (1996) 知的障害者(養護学校卒業生)の余暇活動に関する研究－年齢の要因からの分析を通して－. 東京成徳大学研究紀要, 3, 163-176.
 - 7) 奥住秀之・國分充・橋本真規・北島善夫 (2008) 知的障害特別支援学校に通う高校生における卒業後の労働と余暇に対する意識. SNE ジャーナル, 14, 90-107.
 - 8) 奥住秀之・國分充・北島善夫 (2010) 知的障害特別支援学校高等部生徒における卒業後の労働と余暇に対する期待. SNE ジャーナル, 16, 85-96.
 - 9) 奥住秀之・池田吉史・國分充 (2011) 知的障害特別支援学校生徒における労働期待感と学校生活充実度及び学習・生活スキルとの関連. アジア職業リハビリテーション研究, 1, 22-27.
 - 10) 奥住秀之・國分充・北島善夫 (2011) 知的障害特別支援学校高等部生徒の現在および卒業後の余暇活動. SNE ジャーナル, 17, 161-173.
 - 11) 高畑庄蔵・武蔵博文 (1997) 知的障害者の食生活,運動・スポーツ等の現状についての調査研究－本人・保護者のニーズの分析による地域生活支援のあり方－. 発達障害研究, 19, 51-60.

Received
December 21,2011

Accepted
January 11,2012

Published
April 30,2012

CONTENTS

REVIEW ARTICLE

- A Paradigm Shift in Rehabilitation Medicine:
From “Adding Life to Years” to “Adding Life to Years and Years to Life” **Masahiro KOHZUKI, et al.** • 1

ORIGINAL ARTICLES

- Compatibility of Market and Publicness in Community Service
Innovation Programs of South Korea **Gi-Yong YANG** • 8
- Relation between sports activity experience and individual
attributes of students with intellectual disabilities in
high-school special needs education programs **Hideyuki OKUZUMI, et al.** • 21
- A Study on the Relationship between the Community
Organizing Movement and the Emergence of Social Enterprise in Korea
- Focused on Relationship with Self-Sufficiency Project - **Moon-Kuk LEE** • 29
- Attitudes toward suicide survivors, perspectives on suicide
and death among Japanese university students **Akira YAMANAKA** • 38
- Development Process and the Actual Situation of Social Business in Japan **Hong-Gi KIM** • 51
- Psychological Effects of a program combining exercise with group work:
Toward the development of an effective program for patients with diabetes mellitus **Kyoko TAGAMI, et al.** • 67
- A Evaluative Research of the Effectiveness of the Voluntary Elder Ombudsman **Jung-Don KWON, et al.** • 81
- The Characteristics of Children with Physical Disabilities and the Curriculum
and Teaching Method for Them in the Special Needs Education **Chang-Wan HAN, et al.** • 94
- Categorization of Consumption Expenditure and Analysis of the Factors
Affecting It- For Households with Elderly Members who Participated in
an Employment Promotion Project for the Elderly in 2011 - **Gi-Min LEE, et al.** • 116
- Relationship between Stress-appraisals and Depression among the
Institutionalized Elderly in Korea **Jae-Jong BYUN** • 136
- Relationship between Teacher Mental Health that Involved in Special
Needs Education and Stressor
- From the Analysis of Mental Health Check for Teachers - **Kohei MORI, et al.** • 144
- The current situation of schoolchildren that seems developmental
disorders in general education **Aiko KOHARA, et al.** • 156

SHORT PAPERS

- Implications of Community-Based Human Service Program of South
Korea in the Process of Establishing Health Support System
for the Weak People for Disasters **Keiko KITAGAWA, et al.** • 166
- A study on the development and the issue of the small-scale sheltered
workshop for the persons with disabilities in Taiwan **Chen Liting, et al.** • 176
- A comparative study on Quota System in Japanese and Korea **Moon-Jung KIM, et al.** • 193